高知市におけるジャワ島ガムランの活用状況と今後の課題

金奎道 [1)]、増田久未 [2)]
1)高知大学教育学部 音楽教育研究室
2)東京音楽大学博士課程（音楽教育学）・ガムラン演奏家

Usage Situation and Future Issues of Java Gamelan in Kochi-City, Japan

Gyudo Kim[1)], Kumi Masuda[2)]
1) *Laboratory of Music Education, Faculty of Education, Kochi University*
2) *Doctoral Program Student of the Tokyo College of Music (Music Education), Player of Gamelan*

要約

ガムラン（Gamelan）はインドネシアのジャワ島やバリ島（およびマレーシア一部地域）などで伝承されている伝統的な合奏音楽の総称である。高知市にはインドネシアのスラバヤ市から寄贈を受けたジャワ・ガムランがあり、５音音階を基本とするスレンドロ（Slendro）音階とペロッグ（Pelog）音階の両者が揃ったフルセットのガムランがある。しかしながら、寄贈を受けた 2004 年以来、実際に教育および研修などで活用された期間は短く、その大半は倉庫等に長期間保管されていた。つまり、活用が一時期停止している休眠状態が長いことが分かる。

2018 年度から「学校と社会を結ぶ音楽教育」のプロジェクトの一環として、H 小学校にてガムランの実践が行われ、ガムランが再び日の目を見ることとなった。そこには、子どもに指導できる人材の確保、ガムラン演奏家による支援、行政機関及び学校関係者の協力が大きく関係している。現在は H 小学校のみでガムラン授業が行われているが、今後高知市内にこのガムランの存在や価値が浸透すれば、実務経験のある人々の活躍によって、より多くの児童生徒にガムランに触れてもらい、インドネシアの文化を知ってもらうことができるようになるだろう。

日本国内には、かつての高知市のガムランのごとく埋もれてしまったガムランが多くある。高知市でのガムラン再生プロジェクトが成功すれば、今後その他のガムランを再活用へと導くためのモデルケースとなる可能性もあるだろう。そうした点からも H 小学校での取り組みは注目に値する活動であり、これから継続性のある活動へと展開できるよう、環境が整えられることを期待したい。

Key words：Surabaya, Javanese Gamelan, Cross Culture, Kochi Prefecture

Ⅰ　序論

1. 研究の目的と方法

ガムラン（Gamelan）はインドネシアのジャワ島やバリ島（およびマレーシア一部地域）などで伝承されている伝統的な合奏音楽の総称である。また、その楽器編成・演奏形態もガムランと呼ばれている。ガムランは器楽演奏のほか、舞踊や演劇の伴奏にも用いられる [1)]。

ガムランとそれに関わる活動は、今日ではインドネシアだけでなく世界中に広がりを見せており [2)]、日本には数多くのガムラン演奏団体が存在し、大学等では関連する授業や研修が行われている。日本各地のガムラン分布を調査した増田（2018）[3)] によると、（2017 年 11 月現在）ガムランがある地域は 47 都道府県中 64%、国内に 129 セットを保有している [4)]。そのうち、高知市にはインドネシアのスラバヤ市から寄贈を受けたジャワ・ガムランがあり、

５音音階を基本とするスレンドロ（Slendro）音階とペロッグ（Pelog）音階の両者が揃ったフルセットのガムランがある。

本研究は、スラバヤ（Surabaya）市から高知市へ贈られたジャワ・ガムランがこれまでどのように使われていたのか、その活用状況を調査し、さらに子どもの音楽学習としてガムランの活用法を提案することを目的とする。

研究の方法は以下のとおりである。第一に、ジャワ・ガムランの寄贈を受けた 2004 年から今日に至るまでの活用事例を挙げながら、当時の学校関係者などへのインタビュー調査（定性調査）を行う。そして調査から得られた情報をもとに、高知市の小中学校におけるガムランをめぐる活動（学習史）をまとめる。第二に、新たな音楽活動の試みとして行われた、H 小学校でのガムランの授業実践（2018 年）を概観し、子どもがガムラン音楽とその楽器を学ぶことの意義およびその可能性について述べていく。

2. 先行研究の検討

ガムランが日本に導入されて半世紀近くになる。これまで本場の習得法を参考に日本独自の工夫が加えられ、もはや異文化理解の教材として活用されるほどである。関連する書物も、ガムランの歴史や編成、楽器の種類、音階、演奏の仕方に至るまで幅広く扱っている。さらに音楽民族学の観点から、ガムランの基本奏法（樋口、2016）や音楽的特性（樋口、2017）、ガムランのリズムや音の変容（岡部、2008）、ガムランの構造と技法（佐藤、2000）などに焦点を当てた様々な分析的研究[5]が行われている。

同様に学校音楽教育においても、ガムランを含む「世界の諸民族の音楽」への関心が高まっている。学習指導要領における「世界の諸民族の音楽」に関する記述は、昭和 26 年（試案）の『中学校高等学校学習指導要領音楽編』に初めて登場する（仙頭・高橋、2011）[6]。改訂を重ねるにつれ「世界の諸民族の音楽」を学習する意義や指導方法にも多様性がみられ、特にその音楽を取り巻く文化的側面の理解を通じた学習活動が強調されている（金、2012）[7]。また、音楽科教科書における「諸外国（諸民族）の音楽」の内容分析を行った山下（2018）[8]によると、高等学校音楽科教科書「諸外国（諸民族）の音楽」の鑑賞教材における出現頻度が最も高い（８回）のはインドネシアのガムランである。

このように、学校音楽教育等で世界の諸民族の音楽としてガムランが注目されているものの、児童生徒を対象としたガムランの実践事例は決して多いとはいえない。教科書においても、主に鑑賞教材として取り扱われ「楽器による表現」の区分を設けて、ガムランを配置し紹介する程度である（教育芸術社、MOUSA①の場合）。やはり、青銅打楽器を中心としたガムランを揃えない限り、表現活動として組み立てることは難しいかもしれない。

そこで、本稿と関連する先行研究をいくつか挙げる。

ガムラン音楽の受容の様相を明らかにした橋本龍雄（2008）[9]は、初めてジャワ・ガムランを演奏体験する学生は、①音感覚とのズレにより、ガムランの音響を捉えることができないことから始まる、②演奏しながら自身の音楽経験と格闘し、「一人では決してできない」ことの発見やローテーションによって行う「教え合い」の効果などを理解する、③ガムラン音楽の受容が促進される、というように問題解決過程と関連付けてガムラン音楽の学習を理解している。

小学校を対象としたバリ・ガムラン音楽のアウトリーチ授業[10]（６時間）では、①バリ島のガムランを演奏する、②ガムランの演奏に伴う仮面舞踊「ジャウック（魔物）」を体験する、③担当する楽器の音をイメージした絵を描く、④そして全校生の前で発表するといった活動が行われた。ここでは異文化理解や楽器の演奏技術の獲得にとどまらず、ガムランの魅力を子どもに伝え、共有し、味わうことを通して、音楽演奏において何かを共につくる行為である「合わせる」技能に注目している。

これらの先行研究からもわかるように、ガムランには西洋音楽とは異なる音環境を体験することによって、一人では絶対に演奏できないコミュニティ音楽の本質を学ぶことが期待される。とはいえ、上記の先行研究ではガムランの教材化によって子どもに何を意識させるのかといった教育内容には触れられていない。つまり、子どもに獲得すべき内容や教える内容はあいまいになっているといえよう。そこで本論では、高知市におけるジャワ島ガムランの受容の歴史と現在の状況を調査するにあたって、より教育的な観点から検討していく。

Ⅱ　ジャワ・ガムランについて

1. 音階と旋法

インドネシアは、地域によりガムランの楽器の種類や音楽構造が様々であって、使用している音階も異なる。なかでも中部ジャワのガムランで使用される音階（ララス laras）は、大きくスレンドロとペロッグの２種類に分けられる。

スレンドロ音階は、１オクターブをほぼ均等な幅で５等分に分割しており、1・2・3・5・6 という５つの音で構成される。一方、ペロッグ音階は、スレンドロ音階と違い、1・2・3・4・5・6・7 というように、１オクターブを７つに分けた音階となっている。両者の音程を周波数で表した図を以下に掲載する。なお、ガムランの調律は西洋音楽にある 440 ヘルツというような規格がなく、それぞれのセットによって音程にずれがある。そのため、２つのセットを混合して演奏することはできない、という特徴がある。

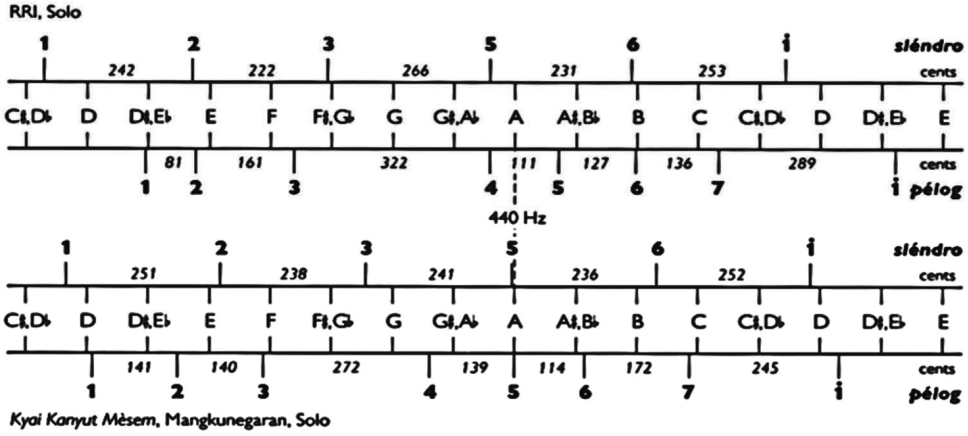


図１　RRI Solo（ソロ国営放送局）のガムランとソロ・マンクヌガラン王宮のガムランの音程の対比図 [11)]

また、それぞれの音階には、パテット（Pathet）と呼ばれる旋法が、大きく分けて３つずつある。スレンドロ音階には、音域の低い旋法から高い旋法へと順にヌム（Nem）、ソンゴ（Sanga）、マニュロ（Manyuro）となっている。また、同様にペロッグ音階の場合は、リモ（Lima）、ヌム（Nem）、バラン（Barang）となる。スレンドロ音階の場合は、先述したようにもともと５つの音で構成されているが、ペロッグ音階は、７音から５音を選んだ旋法で曲を構成している。具体的に各旋法を表すとつぎのようになる。

表１　ガムランの音階と旋法

ペロッグ　Pelog	
リモ　Pathet Lima	４５６１２
ヌム　Pathet Nem	１２３５６
バラン　Pathet Barang	５６７２３

スレンドロ　Slendro	
マニュロ　Pathet Manyuro	６１２３５
ソンゴ　Pathet Sanga	５６１２３
ヌム　Pathet Nem	２３５６１

こうした旋法は、現地ジャワ島ではガムランの演奏会（クルネガン Klenengan と呼ばれる）や人形芝居（ワヤン Wayang と呼ばれる）の上演における時間の流れとも結びついている。中部ジャワの人形芝居は、夜８時から夜明けまで休みなく上演されるが、スレンドロのガムランの場合であると夜８時～深夜 12 時頃までがヌム、12 時～３時頃までがソンゴ、３時～夜明けまでマニュロというように、それぞれの場面で各旋法に基づく曲が演奏される。芝居で上演される物語も、移り変わる旋法と同じように大きく３部に分かれて進められる。このように、ガムランの曲ではいずれの音階とも５音音階となっている。また、それぞれスレンドロ音階ではヌムからマニュロへ、ペロ

ッグ音階ではリモからバランへと高音域になる。

これらの音階は、日本古来の音階と比較すると、共通性が見られるということがわかる。以下に示す図は、それぞれジャワ・ガムランの音階、および日本の民謡音階、琉球音階と呼ばれるものをそれぞれ五線譜で表したものであるが、両者を比較すると、スレンドロ音階は民謡音階と、ペロッグ音階は琉球音階と親和性があると考えられる。ガムランの音高は、西洋の音高と違いやや不安定であるため、完全に五線譜で表すことができるものではないが、音と音との幅や構成において、日本の音階とも通ずるものがあると言える。そのため、《あめふり》や《てぃんさぐぬ花》のようなシンプルな童謡や民謡であれば、ガムランの音階で模倣することも可能である。

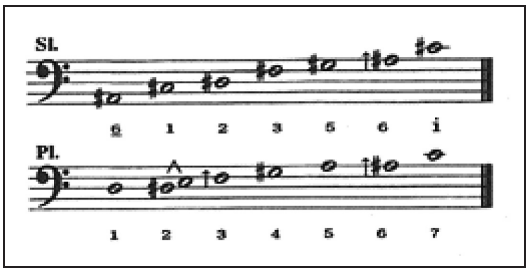


図２　東京音大ガムランの各音高 [12]

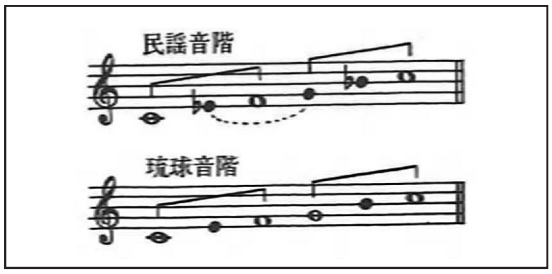


図３　日本の音階 [13]

2. ジャワ・ガムランの楽器

同じ中部ジャワ・ガムランといっても、スラカルタ（ソロ）とジョグジャカルタでは楽器の種類や曲のレパートリー、音楽の性格、演奏法においても若干の違いをもつようになった [14]。ここで紹介する楽器はスラカルタのガムラン例となる。

ガムランは大きく、青銅や鉄や真鍮などの金属製楽器と竹や木などの植物由来の楽器に分けられる [15] が、木村佳代は３つのグループに分けて、それぞれの役割を説明している [16]。本項ではなかでも特にアンサンブルの中心となる楽器について、以下に詳述する。

〇構造を示す楽器（ゴング、クンプル、クノン、クト、クンピャン、クンダン）

ゴングは曲の節目ごとに交互に打ち鳴らされることによって曲の構造が示され、大編成による数多くの音が一つの枠組みの中にまとめられる。クンプルとクノン、クト、クンピャンは、それぞれゴングの１つの周期を分割し、一定の間隔で節目を示す。クンプルとクノンは、１周を４等分、８等分などに区切り交互に鳴らし、クトとクンピャンはそこからさらに細かい節目を示す。水牛の皮を張った両面太鼓クンダンは、一番大きいクンダン・アグン、小さいクンダン・クティプン、中間のクンダン・チブロンの３種類に主に分けられる。この３種類の太鼓を巧みに使い分け、あるいは組み合わせてリズムを刻み、曲の構造を示しながら、速度を決める指揮者の役割を果たす。

〇基本旋律を奏でる楽器（スルントゥム、サロン群）

これらはガムランで演奏する楽曲の骨組みとなる、基本的な旋律を奏でる重要な楽器となっている。サロンは青銅の鍵盤が共鳴箱の上に並べられ、木槌や水牛の角製バチで叩く。音程がオクターブずつ異なる大中小（サロン・ドゥムン、サロン・バルン、サロン・パヌルス）があり、金属の硬くてしっかりとした響きがする。スレントゥムは、薄い鍵盤の楽器で、鍵盤ごとに共鳴筒が付いている。布を巻いたばちで叩くと、余韻の長い柔らかい音がする。

〇装飾楽器（ボナン群、ルバブ、グンデル、ガンバン、クンダン等）

ボナンは、小型のこぶ付ゴングが 12～14 個並べられたもので、糸の巻かれた２本のバチで叩く。音高の異なる大・小の２種類があるが、ボナン・バルン（大）は他の楽器より先行して演奏したり前奏を担当したりすることが多い。一方ボナン・パヌルス（小）は、１オクターブ高い音でボナン・バルンよりも細かく刻み、基本旋律に装飾を加える。そして胡弓型（二弦）の弦楽器は、曲の道筋を決めたり解釈を指し示したりと重要な役割を果たす。グンデルやガンバンは、柔らかな音色でそれぞれ独自の装飾的旋律を奏で、基本旋律に肉付けをする。また、クンダンは先述のような指揮者としての役割だけでなく、テンポを細かく刻んでリズムを整え、装飾的に曲を華やかにす

る役目を果たす面もある。

以上のことを下記の図４に示す。

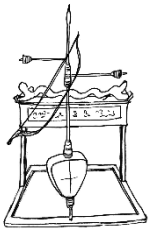
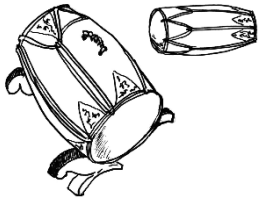
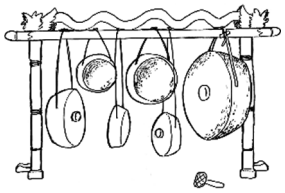
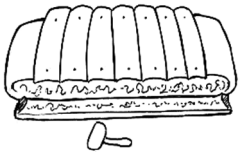
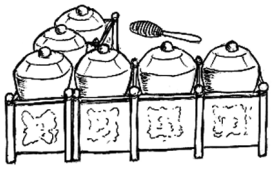
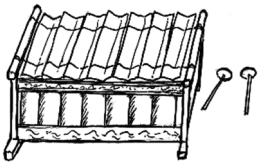
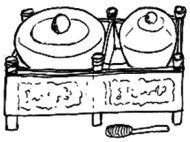
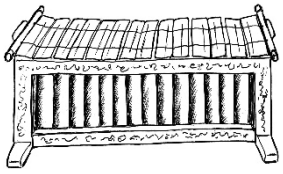
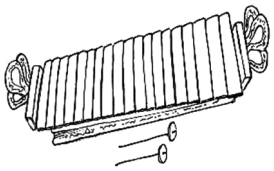
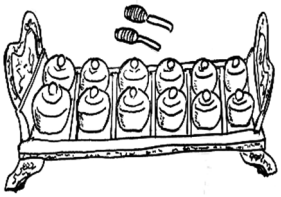
ルバブ Rebab：西アジアを起源とする２弦の撥弦楽器で、弓で弦を擦って音を出す。前奏を弾いたり、つぎに移る曲を決定するなど、クンダンと並ぶ合奏のリーダーとしての役割も担う。		クンダン Kendhang：水牛の皮を張る大・中・小の両面太鼓で、大きい膜面を右にして素手で打つ。曲のテンポや進行をリードする指揮者の役割をする。	
ゴング Gong：こぶ状の突起のある銅鑼で、棹に吊り下げられている。曲の最初と最後、節目の部分で打つ。小型のゴングはクンプル Kempul という。		サロン Saron：鍵盤楽器の一種で、木槌や水牛の角によるバチで叩く。大・中・小と３種類があり、金属的な力強い響きがする。	
クノン Kenong：台に並べたこぶ付き銅鑼で、ボナンを大型にしたもの。ゴングの拍と拍の間で定期的に叩く。		スルントゥム Slenthem：共鳴筒の上に青銅の鍵盤が吊り下げられている。布を巻いたバチで叩くと、柔らかくて低く、余韻の長い音がする。	
クトゥ Kethuk＆クンピャン Kempyang：平置き型こぶ付き銅鑼。（現代では）それぞれ一つの発音体となっている。		グンデル Gender：スルントゥムと同じ構造の青銅製鍵盤楽器で、布を巻き付けた二本のバチで叩く。非常に柔らかい音色がする。	
ガンバン Gambang：舟形の共鳴箱を持つ木琴。軽やかな音色で、オクターブのユニゾンの細かく速い装飾的旋律で曲を飾る。		ボナン Bonang：こぶの付いた青銅の壺が木枠の上に並べられ、糸の巻かれた二本のバチで叩く。ボナン・バルンとボナン・パヌルスの２種類がある。	

図４　ジャワ・ガムラン楽器 [17]

Ⅲ　高知市におけるジャワ・ガムランの学習史

1. 高知市におけるガムランの経緯

インドネシアの東ジャワ州に位置するスラバヤ市は、1997 年４月 17 日より高知市と姉妹都市提携を結んでおり[18]、多くの市民交流の輪が広がっている。両市は姉妹都市の提携以来、経済ミッションの開催や高知新港とタンジュンペラ港との姉妹港提携による経済交流をはじめ、中学生や高校生による教育交流、さらに自治体職員協力交流事業によるスラバヤ市職員の受け入れ研修やスポーツ交流など、さまざまな分野で数多くの情報交換や人的交流が

進められている[19]。

図５　インドネシア・スラバヤ市の地理的位置

こうした様々な交流が行われる中、2003 年９月スラバヤ市開催の第１回「スラバヤよさこいフェスティバル」の返礼としてスラバヤ市から高知市にガムランが贈られた。それは高知新聞（2004 年１月 29 日付 24 面）に「異国情緒豊かな音色 伝統楽器『ガムラン』スラバヤ市が寄贈」というタイトルで記載された。その内容はつぎのとおりである。

> 高知市に姉妹都市のインドネシア・スラバヤ市から伝統楽器「ガムラン」が贈られ 28 日、同市九反田の市文化プラザ「かるぽーと」で組み立て作業が行われた。昨年（2003 年）９月、高知市幹部らが「スラバヤよさこいフェスティバル」でスラバヤ市を訪ねた際、バンバン・ドゥイ・ハルトン市長が寄贈を約束。(2004 年１月）15 日に高知新港に到着した。
> 寄贈されたガムランは太鼓や鉄琴、釜など青銅製の楽器 34 個で６つのパートを構成。楽器の総重量は約３トンにもなる。(中略)「せっかく出来上がったがやき」と同課（市総務課）や「かるぽーと」職員ら約 28 人がステージに上がり、即興の演奏会。思い思いに楽器を鳴らすと、「ドンドン」「ゴワーン」と異国情緒たっぷりの音が重なり合った。同課は「立派な楽器を寄贈していただき、本当にありがたい。今後は小中学校への貸し出しや、市民による演奏会などを企画したい」と話している。　（　　）は筆者加筆

ここでいう「楽器 34 個で６つのパート」が何を指すのかは定かではないが、この時贈られたガムランには、スレンドロとペロッグのそれぞれの音階に基づいたフルセットの楽器があることを確認した。記事からも分かるように、寄贈当初から「小中学校への貸し出し」が念頭に置かれたようであるが、それほどの実績は上げられなかった。スラバヤ市から寄贈された楽器は、これまで地域の１つの中学校と２つの小学校にて教育楽器として活用されていたのみである。その詳細を表２にまとめる。

表２　高知市におけるガムラン楽器のあゆみ[20]

①寄贈	2003 年（H15）スラバヤ市で開催された「スラバヤよさこいフェスティバル」の返礼としてスラバヤ市から高知市へ寄贈。2004 年（H16）１月高知新港に到着し、「高知市文化プラザかるぽーと」へ搬送。
②活用	2004 年（H16）４月から A 中学校で活用開始。同年 10 月同校音楽祭で演奏される。 その後は「かるぽーと」にて保管され、自治体職員協力交流研修員が市民講座等で使用。
③移送	2009 年（H21）４月「かるぽーと」BF１駐車場内倉庫および通路空きスペースに保管されていたが、通路にモノを置くと、緊急時避難の妨げになる可能性があることから、生涯学習課所管の倉庫（大原町・旧国体事務所）へ移送し保管。
④移送	2012 年（H24）４月から大原町の倉庫がねんりんピック事務所として使用されることになり、ガムラン移送の必要が生じたため、市内小中学校で活用（保管）を希望する所がないか学校教育課を通じて校長会で呼びかけたところ、K 小学校から申し出があった。2011 年（H23）12 月 20 日大原町および「かるぽーと」のガムランを一括して K 小学校へ移送。

⑤移送	K 小学校から、ガムランを保管している部屋を相談室として活用するため、現在使わなくなったガムランを引き取ってほしいとの連絡があり、2017 年（H29）11 月 26 日 K 小学校から春野総合倉庫（旧春野庁舎）へ移送。
⑥活用	2018 年（H30）２月、H 小学校の N 教諭らからガムランを活用して授業を行いたいとのことで、一部（ペロッグ音階）貸し出し。同年 10 月 1 日演奏会に出席（国際交流員、LGOTP 研修員と同行）。

※高知市総務課からの情報提供をもとに筆者が加筆修正したものである。

表２をみると、ここ 15 年のうち、実際に教育および研修等で活用された期間は短く、その大半は倉庫等に長期間保管されていた。つまり、活用が一時期停止している休眠状態が長いことが分かる。全国のガムラン分布を調査した増田は、ガムランがお蔵入りになった理由として、「楽器そのものが何なのか分かる人がおらず、封も開けられず眠ったままのもの、かつて指導していた教員が異動し、指導者が不在となり眠ってしまったもの、サークルのメンバー減少で成り立たなくなったしまったものなど」[21] が原因と述べている。高知市の場合は、当初は市民講座での使用や公立中学校からの申し出に応じて有効活用されたが、指導できる人材の不足により、休眠状態が長くなったと推察される。

2. 高知の小中学校におけるガムラン学習史

最終的に休眠状態となってしまったとはいえ、スラバヤ市から贈られたジャワ・ガムランが、これまでいくつかの小中学校で活用されたことは注目に値する。そこではどのような教育活動が展開されたのか。活動事例の詳細な情報を知るため、公立 A 中学校、K 小学校、H 小学校における当時の関係者へのインタビュー調査を通して明らかにする。

（1）公立 A 中学校 [22] の活動事例　保管期間：2004 年６月～2004 年 11 月

音楽教諭 O 氏は、1999 年から 2001 までの３年間、ジャカルタの日本人学校で音楽の授業を担当し、アンクルン（竹製の打楽器類）を授業に活用したり、日本人会から学校に贈られたバリ・ガムランに触れたりする機会があったが、インドネシアの音楽文化に詳しいわけではなかった。

帰国後、2004 年に「スラバヤ市からガムラン寄贈」という新聞記事を読んで、学校でのガムラン活用について高知市に打診し、教職員総出で学校に楽器を運搬した。３年生の選択教科（音楽）で活用することを思い立ち、ジャワ・ガムランを学ぶために大阪拠点の演奏団体ダルマ・ブダヤまで何度も足を運んで、専門家に助言をもらった。指導では、まず各々の楽器の奏法を学習してメンバー全員が各楽器の役割を理解することから始めたが、バチで音板をたたくと同時に、前に叩いた音板を押さえて音を止める奏法に慣れるのには時間がかかった。10 月の校内文化祭では、O 氏がインドネシアで購入した衣装用の布地を保護者の縫製作業で仕上げたものと、インドネシア総領事館から貸与した民族衣装を生徒が身にまとって演奏する本格的なステージとなった。高知市長をはじめ多くの来賓や関係者の前で発表することとなり、生徒は緊張の面持ちであったが、練習した内容は十分に発表できた。

A 中学校のこうした取り組みは高知新聞（2004 年 11 月 1 日付 24 面）に「インドネシアの楽器で魅了 A 中学生が文化祭で披露」というタイトルで掲載された。その内容は、「同校の文化祭の中で開かれた演奏会で、青や赤の手づくりの民族衣装をまとった生徒がインドネシアの代表曲の『リチェ・リチェ』と『マニャール・セウ』の二曲を演奏。素朴で独特の響きの音色で奏でられる幻想的な楽曲を、生徒や保護者ら約七百五十人が楽しんだ」と綴られ、当時の様子を垣間見ることができる。

このように、A 中学校の教諭 O 氏はインドネシアでの勤務経験があるものの、ガムランの演奏経験はなかった。帰国後に偶然メディアを通じて高知市にガムランがあることを知り、自らが行政機関に楽器の活用を打診したのである。O 氏自ら遠路はるばる出向いてガムランを学びながら選択教科の生徒に指導したという話では、教師としての情熱が感じられる。また、音楽祭では簡単な曲を演奏したというが、民族衣装の貸与と製作により、生徒を本物のインドネシア伝統文化に近づけようとする努力があったことが窺える。しかし音楽祭が終わると、ガムランがす

ぐさま市へ返却されるが、それは学校の保管場所の問題で最初から期限付きの貸与であったという。

(2) 公立K小学校[23]の活動事例　保管期間：2011年12月～2017年11月

高知市から地域の小中学校でのさらなる活用を求め、校長会で呼びかけたところ、K小学校から申し出があり、ガムランのフルセット（ペロッグとスレンドロ）が運ばれた。管理職の指示であるため仕方なく小学校が引き取ったものの、当初指導できる（もしくは活用できる）教員は不在であった。やむなく大荷物のガムランを視聴覚準備室に保管したり、いくつかの楽器は音楽室に置いて管理したりしていたが、多くの先生から苦情が出た。校長からの指示で音楽専科のI氏が担当することとなったが、ガムランが何なのか分からないため触ってもいい展示品のごとく、子どもにサロンやゴング等を打たせたり、楽器の名前を紹介したりする程度に留まった。2015年12月14日、K小学校がガムランを所有しているという情報を得た筆者（増田）は、日本のガムランの楽器の所在と活用状況に関する調査研究の一環として、K小学校を訪ねた。木箱の中に保管されている状態である楽器を見て、筆者は当時その対応にあたったI氏に、是非、小学生を対象としたガムランの授業を行いたいと申し出た。まず、I氏はじめK小学校の先生方の協力も仰ぎ、視聴覚教室からペロッグ音階の一部の楽器を音楽室へと移動させた。その後 12 月15日・16日の２日間をかけて、３～６年生を対象としたガムランワークショップを行った。それぞれ２時間の授業をチーム・ティーチングで行い、I氏はT２として主に戸惑っている子どもへの手助けを行った。授業では、まずインドネシアの地理・風土・文化的な側面を説明した上で、ガムランの各楽器の奏法について、音を出しながら説明した。その後各楽器の奏法や役割を子どもたちに理解してもらいながら、《スウェ・オラ・ジャムゥ》を合奏した。初めて見て触れる音楽を体験してもらう際には、正しい楽器の奏法技術を指導し覚えさせることよりも、新たな音楽文化の一端を深く感じ取り、記憶に留めることの方が重要であると筆者は考えている。そのため、限られた時間内の短いワークショップでは、《スウェ・オラ・ジャムゥ》という曲の骨格旋律の一部である一つのフレーズ「3565 4216」をまず子どもたちに歌ってもらい、それから楽器に触れてもらった。今回は一部の楽器しか使用できなかったため、全員の子どもに楽器に触れてもらえない時もあったが、見ているだけの子どもたちにも、声に出して先述のフレーズを歌ってもらった。結果として、授業後にもそのフレーズを歌いながら教室を出ていく子どもたちも見受けられるなど、ガムランという新たな音楽文化を子どもたちの記憶として深く留めたと感じられた。

筆者は、こうしたガムランワークショップを定期的に続けていくことのできる体制を整えるべく、「高知市ガムラン活用プロジェクト」という企画書を作成して高知市の教育委員会を訪ね、当時対応にあたった教育委員会の職員に、企画書をもとにK小学校で行ったワークショップの成果、高知市のガムランの価値や教育的活用意義を説明した。しかし、筆者自身が高知市在住ではないことが大きな問題であるためか、功を奏することなく、企画は流れてしまった。たとえ筆者の企画が通らなかったとしても、高知市のガムランにどれだけ価値があるのか、教育的に活用意義があるのかさえ伝われれば、地元でガムランを活用していくための勉強会を開くなどの声があがるかと期待したが、なかなか理解されにくいものだということも明らかとなった。

このようにK校の場合は、ガムランの教育的な活用を求めた市の呼びかけに学校が応じたため、上記のA校とは違ってガムランの運搬なども市が担当した。しかしK小学校には、ガムランが指導できる（あるいは分かる）教員が不在であったため、当分の間は、サロンとゴング以外は封も開けず山積みにされていた。幸いにもガムラン演奏家の来校によって、ガムランが休眠状態から目覚め（組み立てられ）２日間の特別授業が行われたものの、それは一過性の催しに過ぎなかった。時たま、音楽教師のI氏がガムランに触れるよう子どもに配慮したことは認めるが、教室を２か所も占有していたために他の先生の苦情が殺到していたという話では、ガムランが厄介な存在として扱われていたと推測される。K小学校にガムランが置いてあった時期は概ね６年となるが、実際はあまり活用されなかったといえよう。

(3) 公立H小学校[24]の活動事例　保管期間：2018年８月～現在に至る

しばらく市の倉庫に山積みされていたガムランが動き出したきっかけとなったのは、日本音楽教育学会のプロジェクト研究において音楽授業の新しい在り方が提案されたことである。小学生を対象としたガムランの授業が企画され、指導できる教師の存在と学校長の承認が合わさってH小学校にガムランを置くこととなった。音楽専科のN

教諭は、大学院在学中にジャワ・ガムランの集中講義を受けており、大学のサークルにてバリ・ガムランの演奏活動を行うなどインドネシア芸能に造詣がある。楽器の組み立てやセッティングに関しては、東京のガムラン演奏家に依頼して行い、楽器の奏法や扱い方について簡単なワークショップをしてもらった。さっそく、２学期からの授業等にガムランを取り入れることとし、音楽授業や特別活動などに活用し始めた。２学期だけでも６年生は５～７時間、５年生は２時間、その他の学年は１時間ほどガムランを体験した。また、高知市授業研究会にて４年生対象の「ガムランの音楽に親しもう」（３時間）も行った。

このように、長い間放置されていたガムランが 2018 年８月から再び光を浴びることとなった。それにはガムランを保管・管理する場所を提供した学校側の理解と、ガムランが分かるとともに教材として活用できる教師の存在が合わさったということがあり、中長期的にガムランの授業実践が行われるようになった。H 校にてこうした実践がいつまで続くのかは定かではないが、今後の見通しとしては教員の異動がない限りは継続するだろう。

図６　H 小学校第２音楽室の全景（2018 年９月 21 日、筆者撮影）

以上の３校におけるガムランの学習史を概観すると、ガムランは青銅製の打楽器が多く、かなり重さがあるため持ち運びに不便があったと推察される。楽器の重量を考えると学校に常設で設置して活用するしかないが、それには学校全体の理解が求められる。さらに、教育的活用にあたってガムランについての知識および技能を備えた教員の存在が重要であると考えられる。ガムランの学習における大切な要素のひとつは、こうした物的・人的環境を整えることであるだろう。

Ⅳ　ガムラン音楽の教材化

とりわけ、現在 H 小学校で行われているガムランの取り組み [25] は、どのような人的環境が整って学習成果を上げているのだろうか。

先述したとおり、ここで挙げる H 小学校での実践は「学校と社会を結ぶ音楽教育のプロジェクト」の一環として、ガムラン再活用を促す施策から打ち出されたものであり、TAS モデルに基づいて行われた。TAS モデル [26] とは、子どもの実態をよく知る教師 T＝Teacher を授業者として位置づけ、A＝Adviser としての音楽の専門家（研究者や作曲家等）の知見のもとに、S＝Supporter として授業を自らの音・音楽によって支える演奏家の参加、という３者の協働による新たな授業の在り方が提案されたものである。TAS モデルにおける T と A と S の３者は、それぞれの役割をもって子どもと関わりながら学習支援などを行い、状況に応じた適切な学びを提供することが求められる。

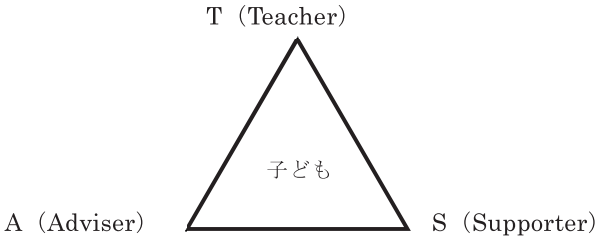


図７　TAS モデル

（１）Teacher について

教職歴 30 年となる N 教諭は、20 年前の修士課程在学中に少ないながらもインドネシアのジャワ島やバリ島ガムランの演奏経験がある。H 小学校にガムランを設置して中長期的に実践授業を行うこととなった理由は、ガムランに対する知識や演奏技能を備えたこの教師の存在があったからである。そして N 教諭は、単発の体験授業ではなく音楽づくりを意識した授業構成としてガムランの実践を組み立て、市の音楽教育研究会などにて披露した。

表３は、H 小学校第６学年を対象とした音楽科の活動内容を示したものである。

表３　ガムランの指導計画（2018 年９月 19 日から 10 月 11 日までの計７時間）

時	学習活動
第１時	ガムランの基本的な奏法を知り、拍の流れにのって音を出すことができる。
第２時	《Haruno-Higashi No.1》の演奏を通し、ガムランの各楽器のもつリズムの違いを知り、合奏することができる。
第３時	ガムランの４つの音の組み合わせを決め、楽器の担当や演奏順を考え、グループごとにガムランの音楽づくりをする。
第４、５時	グループで４つの音を組み合わせた旋律をもとに、楽器のつなぎ方や重ね方を工夫して一つの作品をつくる。
第６時	グループごとに作品の演奏がスムーズにできない理由を考え、問題解決するためにはどうしたら良いかを話し合い練習する。
第７時	グループごとにつくった作品の発表をする。

授業においては、聞きなれないカタカナ表記の楽器は分かりやすい用語と写真資料を一緒に提示したり、グループごとに自分たちの音楽の全体像が確認できるようワークシートやホワイトボード等を活用したりと、授業計画や教具製作において子どもの実態をよく知る授業者ならではの工夫が施された。授業では、子どもが見よう見まねで楽器の奏法を習いながら合奏を重ね、自分たちの音楽を構成し音のつなげ方や重ね方などを自由に工夫するなど、異文化の音楽にすっかり溶け込んで楽しむ姿が見受けられた。

（２）Adviser について

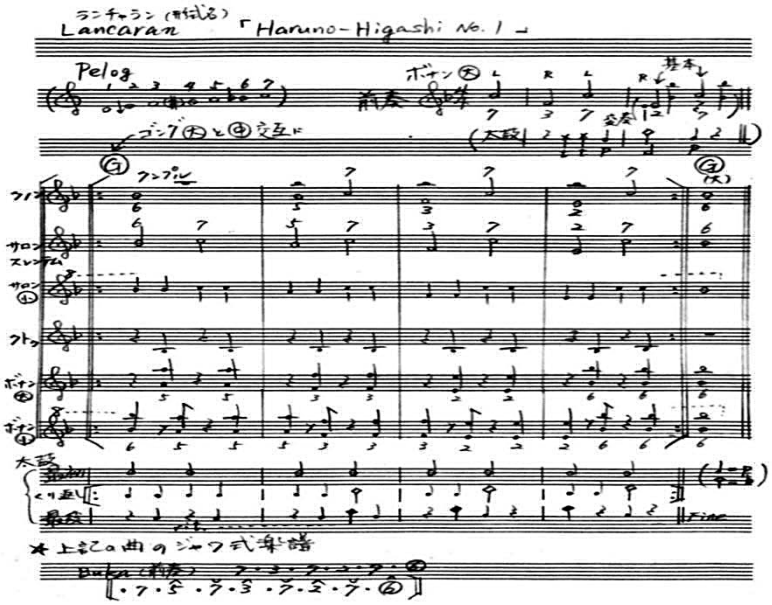


図８　ガムラン演奏家 M 氏作曲の《Haruno-Higashi No.1》の楽譜

Adviser として参加したガムラン演奏家は、2018 年８月高知市の春野総合倉庫からお蔵入りされていたガムランを取り出してＨ小学校に移動･設置する際に､楽器の組み立て等に大いに関わってくれた｡楽器の設置後には Adviser による簡単なワークショップが行われ、ジャワ・ガムランの奏法や指導法などが伝授された。例えば、普段耳にしないホナン・バルンとボナン・パヌルスの２種類の楽器名は、それぞれ大ボナンと小ボナンのごとく簡略化したものが提案された。

さらに、ガムランの簡単な形式を用いた小学生（あるいは、初心者）向けの《Haruno-Higashi No.1》という楽曲をもつくってもらった。この曲は、ガムランのもっとも小規模なランチャラン Lancaran 形式で８拍が一周となり、ペロッグ音階に基づいた 6532 を骨組みとして、その間に７を加えた旋律（675737…）[27] である。現地ジャワ島の古典曲の形式の中でもシンプルな構造をしたものではあるが、すぐに覚えることができて、子どもたちがガムランを通じてインターロッキング音楽の楽しさを体験できるようになっている。

（３）Supporter について

もとは４～５時間目の授業に複数の Supporter が加わり、様々な形で子どもの学びを支援する予定であったが、台風の影響により来校できなかった。従って、Supporter の生演奏が子どもに閃きを与えて自分たちの表現に生かしていく様子は見受けられなかった。しかしその代わりに、市の教研音楽部会のため授業参観に来ていた地域の先生らが、思いもよらない形で子どもの音楽活動に関わったことは注目に値する。子どもは既成の音感覚（十二平均律など）とは異なる異文化の音楽学習に積極的に取り組みながらも、初めて習う楽器の奏法や数字譜には言葉では言い表せない戸惑いがあったと推察される。最初から Supporter の働きを意識したことではないが、偶然にも授業参観者からの音や言葉による支えが子どもの音楽活動に良い影響を与えたのである。子どもの授業アンケートには、「たくさんの先生がいて、質問をしたらすぐに答えてくれたり、自分がやっている時に隣にいてサポートしてくれた」「他の先生がゴングのリズムを分かりやすく教えてくれた」「見に来てくれた先生たちと一緒に演奏したことが楽しかった」等と述べられており、それを裏付けている。

Ⅴ　結論

2004 年にスラバヤ市から都市相互の発展と親善の証として高知市へジャワ・ガムランが寄贈され、15 年の年月が経っている。他のガムラン研究者や演奏団体のごとく必要に応じてガムランを購入（輸入）し活用したのではなく、先にガムランが贈られてそのあと使い手を探したため、高知市におけるガムランは活動期より休眠状態が長かったことが見て分かる。そのため、ペロッグ音階とスレンドロ音階を揃えたフルセットのガムランがあるものの、高知市にガムランが根付いているとは言い難い。

多少なりとも高知市におけるガムランの学習史をみると、注目すべき３つの活動事例が挙げられる。

まずＡ中学校の場合は、インドネシアの日本人学校での勤務経験のある音楽教員が帰国後に市役所からガムランを貸借したことによって、選択教科（音楽）の学習活動にガムランが活用されたのである。指導にあたっては自ら大阪のガムラン演奏団体まで足を運び、そこで学んだ内容を生徒に伝授した。文化祭ではインドネシアの民族衣装を身にまとって舞台で演奏し、その様子が地域の新聞やテレビなどに大きく報道された。しかし、当初から教科学習に活用することを目的とした期限付きの貸借であり、半年後には市へ返却された。この取り組みは、ひとりの教員が教育に対する情熱をもって行ったものであり、教育的活用を考える上での示唆となる。

Ａ中学校での活用が終わってから、ガムランは７年間の休眠状態に入る。その後教育的活用を期待した管理職の独断でＫ小学校へ搬送したものの、指導できる人材の不足により楽器の箱も開けないまま保管された。2015 年ガムラン演奏家の声掛けで、ガムランを用いた特別授業が行われ、子どもたちがインドネシアの風土・自然・文化などを理解しながら、ガムランの簡単な奏法を学び、合奏音楽の楽しさを味わうことができた。長い保管管理期間を考えると、短い活動期ではあるが、特色ある教育活動であったことは評価できよう。

Ｈ小学校におけるガムランの実践は、音楽教育学会のプロジェクト研究の一環として行われたため、子どもに指導できる人材の確保、ガムラン演奏家による支援、行政機関及び学校関係者の協力が合わさって実践したものであ

る。そのため、異文化の音楽や楽器に触れる単なる体験とならぬよう TAS モデルに基づいて子どもの学びを支援する授業づくりを心がけ、子どもの主体性を育むために音楽科の授業として構成したことに意義がある。

スラバヤ市からの贈呈品である高知市のガムランは、大変価値のあるものであり[28]、また状態も良く、お蔵入りさせておくのには相応しくないものであると評価できる。高知市におけるガムランが貴重な海外の文化遺産であることは言うまでもないが、保管や管理が行き届かないと意味をなさない。幸いに現在、H 小学校にてペロッグ音階のガムランが使われているものの、スレンドロ音階のガムランの半セットはまだ休眠状態が続いている。埋もれてしまっているガムランを掘り起こし、次世代を担う子どもたちが継続的な活動を行うための環境を整えることが急務であろう。

ここで日本におけるガムランをめぐる活動状況の調査を継続して行っている筆者（増田）の見解を述べたいと思う。すでに先述したとおり、筆者自身、スラバヤ市と姉妹都市を結んだ寄贈品として贈られた高知市のガムランが K 小学校で保管されている当時に現地に赴き、楽器が使用されないまま保管されている状態から何か活用できる手立てはないかと考えていた時期があった。その後実際に地元で、ガムランに造詣のある音楽教員が勤務する H 小学校へとその楽器が引っ越し、ようやく日の目をみることができたことによって、H 小学校が今後ガムランをめぐる新たな実践現場の拠点として、地元のコミュニティが形成され、様々な活動が展開される可能性が大いに期待できることとなった。ガムランは青銅でつくられた大きく重い打楽器を中心とするアンサンブルであり、本来持ち運んで演奏することがあまり想定されていないため、機動力に乏しいという特徴がある。そのため、楽器があるところを拠点として、そこに人々が集い、コミュニティが構築されるということが理想であろう。加えて、ガムランは１人で演奏することができず、様々な楽器それぞれに明確な役割があり、演奏者全員で１つの音楽をつくり上げていくという点からも、潜在的にコミュニティが形成される力を持つ音楽であるとも言える。また、すでにこうした楽器の特徴から、地元の人々によって長期的に活動が行われている活動例も日本国内に複数あることが判明している[29]。このことから、筆者は、ガムランのある地域に定着した活動が展開されることが、継続性のある活動へとつなげていくために重要となると考える。

今後の活動の見通しとして、以上のようなガムランが本来持つ特徴が高知市の音楽関係者を中心に浸透し、その価値や効果を共有していくことが必要とされるだろう。そのためには、ガムランによって何ができるのか、どのような効果があるのか、といったことを伝えることができる専門家の力が必要となると思われる。さらに、中長期的にみて、専門家とまでは行かずとも、専門家から一定期間学んだ「準専門家」と言える存在が地元に登場することを期待したい。専門家となるには、インドネシアに留学したり、日々ガムランの演奏技術の訓練をしたり、知識を学ぶなど、時間や金銭面での負担が非常に大きくなる。しかし、すでに長期間学んだ熟練者と言える日本在住の専門家から定期的に講義を受けるなどすれば、基礎的な技術や知識を効率よく培うことができるだろう。そうした環境を整備するためには、本論文の契機となった「学校と社会を結ぶ音楽教育」プロジェクトの理念が適しているということが、今回の H 小学校の事例からも明らかとなったと言えよう。また、現在は H 小学校のみで行われているが、今後高知市内にこのガムランの存在や価値が浸透すれば、「準専門家」の活躍によって、より多くの人々にガムランに触れてもらい、インドネシアの文化を知ってもらうことができるようになるだろう。

日本国内には、かつての高知市のガムランのように、埋もれてしまったガムランが多くある。高知市でのガムラン再生プロジェクトが成功すれば、今後その他のガムランを再活用へと導くためのモデルケースとなる可能性もあるだろう。そうした点でも、H 小学校での取り組みは注目すべき活動であり、今後継続性のある活動へと展開できるよう、環境が整えられることを願うばかりである。

付記

2020 年度後期から高知市のガムランを貸与し、共通教育教養科目「ガムラン演奏基礎演習」を新設することとなった。大学教育におけるガムランの活用について、快く協力して頂いた高知市関係者の皆様に心から感謝申し上げる。

注および参考文献

１）皆川厚一（2015）「ガムラン‐バリの音伝統と文化遺産」、鈴木政宗編集『アジアの文化遺産　過去・現在・未来』慶応義塾大学東アジア研究所、p.109

2）同上書、p.109

3）増田久未（2018）『日本におけるガムランの活用に関する一考察‐その変遷と現状分析をもとに‐』東京音楽大学修士論文

4）日本国内にある 129 セットのガムランのうち、35 セットは定期的に使用されない楽器であり、それを休眠状態と呼んでいる。そのうち、26 セットは完全休眠の状態である。増田久未（2018）、同上書、p.22

5）樋口文子（2016）「インドネシア中部ジャワ、スラカルタ様式のガムラン音楽に於ける、ボナンの基本奏法について」『伝統と創造』Vol.５、pp.15-28、樋口文子（2017）「ジャワガムラン初歩の習得法に見る、音楽的特性についての考察」『伝統と創造』Vol.６、pp.1-14、岡部裕美（2008）「ジャワ・ガムランへのアプローチ-リズムの変容・音の変容」『千葉大学教育学部研究紀要』第 56 巻、pp.387-398 などが挙げられる。

6）仙頭まり子・高橋美樹「中学校音楽科における『世界の諸民族の音楽』の学習と変遷」‐学習指導要領、授業実践事例の調査を通して‐」『高知大学教育学部研究報告』第 71 号、p.55

7）金奎道（2012）「異文化芸術を経験することの意義について‐音楽学習における文化的側面の提示と生徒の受容から」日本学校音楽教育実践学会『学校音楽教育研究』第 17 号、pp.37-48

8）山下正美（2018）「中学校・高等学校の音楽科教科書における『諸外国（諸民族）の音楽』の内容分析」中央教育研究所『中研紀要「教科書フォーラム」』No.19、p.70

9）橋本龍雄（2008）「音楽科学生におけるガムラン音楽受容へのアプローチの様相－ジャワ島のガムランの場合－」『福井大学教育地域学部紀要Ⅵ（芸術・体育学 音楽編）』第 38 号、pp. １-16

10）櫻田素子（2017）「音楽表現の技能を培う、アジアの民族音楽の可能性：横浜市立俣野小学校におけるバリ・ガムランのアウトリーチ授業事例」『東邦音楽大学・東邦音楽短期大学紀要』第 27 巻、pp.15-28

11）Pickvance Richard（2005）A GAMELAN MANUAL : Player’s Guide to the Central Javanese Gamelan. Jaman Mas Books, p.46 より引用

12）佐藤まり子（2000）「ジャワ・ガムランの構造と技法の研究（その２）」東京音楽大学民族音楽研究所『伝統と創造』、p.56 より引用

13）小泉文夫（1994）『日本の音』平凡社ライブラリー、p.308 より引用

14）木村佳代（2010）「ジャワのガムラン音楽」皆川厚一編『インドネシア芸能への招待‐音楽・舞踊・演劇の世界』、東京堂出版、p.57

15）皆川厚一（2015）、前掲書、p.130

16）木村佳代（2010）、前掲書、pp.57-62

17）岡部裕美（2008）「ジャワ・ガムランへのアプローチ‐リズムの変容・音の変容」『千葉教育大学教育学部紀要』第 56 巻、pp.387-398、木村佳代（2010）、前掲書、pp.55-80 を参考に筆者が加筆修正した。

18）外務省ホームページ、（2019 年 1 月 23 日閲覧）
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/yukou_2008/shimai_kochi.html　高知市とスラバヤ市は、教育・文化・その他各般にわたっての情報交換や人的交流を通じて、都市相互の発展と理解、親善を進め、世界平和に貢献している。

19）高知市・スラバヤ市姉妹都市委員会（2008）『高知市・スラバヤ市姉妹都市提携 10 周年記念誌』、p.10

20）筆者は高知市総務課に情報提供を依頼し、ガムランの寄贈から移送と活用等が分かる資料を入手することができた。

21）増田久未（2017）、「未来に向けたガムラン活用法の提案‐各団体の活動状況と諸問題をもとに」、音楽芸術マネ

ジメント学会編『音楽芸術マネジメント』第９号、p. 63

22）2019 年７月４日に行っ O 氏へのインタビュー調査と、彼が当時の活動を書き記した以下の文献を参考にまとめた。高知市文化振興事業団、『文化高知』No. 123、2005 年１月、pp. ４－５

23）2019 年６月 24 日のインタビュー調査による。

24）2019 年６月３日のインタビュー調査による。

25）H 小学校におけるガムラン実践の詳細な情報は、筆者（金）が新しい音楽教育を考える会（Institute of Creativity in Music Education）編集『音楽の授業づくりジャーナル３号』にて報告している。
http://icme-music.sakura.ne.jp

26）新しい音楽教育を考える会（Institute of Creativity in Music Education）編集『音楽の授業づくりジャーナル２号』、pp. １－２、（http://icme-music.sakura.ne.jp）

27）西洋音楽では休符にあたるところに同じ間隔で同じ音を弾く奏法。現地ではパンチェル（pancer）と呼ばれる。

28）高知市に贈られたガムランはたいへん立派で、相当な価値のあるものだと、ほかの専門家からも判断されている。ガムランは大抵、１セット 300～400 万円（円換算）する高価なものである。

29）増田久未（2018）、前掲書、pp. 68-71